令和六年度

第四回

国語問題

〔注意事項〕

一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。

二、問題は一・二で、二十ページにわたって印刷してあります。
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。

三、解答は、すべて解答用紙に記入し、**受験番号・氏名**をもれなく、正確に記入すること。

四、問題冊子の表紙にも、**受験番号・氏名**を必ず記入すること。

受験番号

氏名

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

一

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

二十三歳の篠田凛子（私）は十九歳で視力を失った。その後、母を交通事故で亡くし、漫画家であった父は理由もわからないまま突然いなくなり、行方不明になってしまった。現在は兄と二人で暮らしていて、ボランティアの伊東久美子の助けを借りて、歩行訓練をしている。

「今日は晴れて良かったわ。ここんところずっと雨でしょ。梅雨って、私大嫌いなの」藤村典子が言った。

私は「そうですか」と答えた。

①私の声には不安な心持ちが反映されているのではないかと思うのだが、典子は気にする風もなく、どんどん進んでいく。

私は典子の左腕に掴まって、兄が待っている喫茶店に向かう。

頼りは、典子が持つ白杖（注1）だけだ。私の歩行補助者が（注2）全盲者というのは初めての経験で、恐怖心を隠すのが難しかった。

久美子に紹介してもらった典子が、今日中野のカしホールで盲人卓球の練習をすると聞き、訪ねて来た。

同行してきた兄はすぐに退屈してしまったようで、向かいの喫茶店で待っているからとホールを出て行ってしまった。

雨が降っていたら、どうしただろう。それでも兄は、私を全盲者に預けて喫茶店に行ってしまっただろうか――。恐らく行くだろう。障害者に対する思いやりのない人だ。妹への家族愛も薄い。②たった二人の兄妹であっても、精神的な距離はとても開いていた。

もう一人の家族、父からは連絡がない。

警察からも。以前兄が確認をした遺体は、父とは別人だと判明し、その後は警察からなにも言ってこない。
身代金の要求はなく、銀行口座からお金が引き出された形跡もない。
父は消えてしまった。
父がいなくなってからの一年半、私は堂々巡りの思考を続けている。自ら家を出たと考えれば腹が立ち、父親としての無責任さを責める。しかしすぐに、事件に巻き込まれた可能性が頭に浮かび、今度は父を責めた自分を咎めた。
「着いたわよ」
典子の声に、私は思考を中断した。
私は左手に持っていた自分の杖を、右手に持ち替えた。典子の腕を掴んでいた右の掌は、少し汗ばんでいた。
典子の後に続いて、店内を進む。
兄が「こっちだ」という声が聞こえてきた。
私は、吐息をつき、進路を少し左に変更して、さらに足を運ぶ。
視覚障害者が二人で杖を振って歩いているというのに、兄は「こっちだ」と非常に抽象的な表現でナビ(注3)をする。
こんな兄に、私の手伝いができるのだろうか。
父の連載はいったん無期限の休止と発表し、アシスタント(注4)には辞めてもらった。意外なことに、再開を望む声が編集部に多く寄せられ、漫画家を替えて続けることになった。私の原案にソって、西尾(注5)がコマ(注6)割りや表情、動きなどの演出(注7)をして、画は新人漫画家に描いてもらった。しかし担当が増えて、時間の遣り繰りが難しくなった西尾が、なにを思ったか、自分の代わりにと兄を指名した。
「そこだ」
兄の声がすぐ左から聞こえてきて、私と典子は足を止め、並んで座った。
私は言った。「兄です。こちらは藤村典子さん」

「こんにちは」と典子が言って、兄が「どうも」と答えた。

私は説明した。「コミックのストーリーを考えるのが私の仕事で、今、視覚障害者の女の子が主人公の物語を連載中なんです。自分の経験からアイデアを出すのではなく、いろんな人たちから取材して、作品の幅を広げた方がいいと編集者からアドバイスされまして――ハッピーサポート(注8)の久美子さんに聞いたら、典子さんを紹介してくださいました。今日は時間を取っていただいてありがとうございます。兄は、これから――一応、私の手伝いをすることになっていて……どこまでやってくれるか心配なんですが、画のチェックを私はできないので、仕方なくって。今日は同席してもらったほうがいいかと思って連れてきました。よろしくお願いします」

「こちらこそ」典子が笑った。「私の話なんかが、ヤクに立つかわかりませんけど。盲人卓球、お兄さんはどう思いましたか？」

「えっ？　俺ですか？　どうって……運動神経で争ってるんじゃなくて、聴覚の正確さを競ってるような――痛ぇよ。③凛子、足を蹴んなよ。なんだよ。俺、なんか失礼なこと、言いましたか？」

「いえいえ」典子が答えた。「④おもしろいお兄さんね」

私は、すでに兄に同行を頼んだことを⑤後悔していた。

兄が言った。「ボールに鈴ですか？　入ってるんですよね。その音に耳を澄まして、打ち返すんですよね。耳のいい人が勝ちますよね。運動神経が良くても、耳が悪かったら、来る方向がわからないからミスしますよねって、痛ぇっての。足を蹴るなよ」

⑥典子が笑いながら言った。「その通りですよ。本当にね。お兄さんが言う通りだわ」

メロンジュースとオレンジジュースを頼み、私は典子に向けて言った。「兄の失礼をお詫びします」

典子は［A］と笑い声を上げた。

しばらく典子と世間話をしていると、注文したドリンクがテーブルに運ばれてきた気配がした。

私は兄の言葉を待った。

「はっくしょん」

兄が大きなくしゃみをした後、ハナをかむ音がしてきた。

私は恥ずかしさを我慢して兄に言った。「目の前に視覚障害者が二人いるのに、なにしてんの？」

「あ？」間抜けな声を兄が上げた。

「どこにグラスがあるか言ってよ」

「あぁ。えっと、藤村さんの正面にオレンジジュースがありますよ。その左――じゃなくて、右に水の入ったグラスですね」

「頭おかしいんじゃないの？」私は兄に食って掛かった。「そんなんじゃ、位置関係が全然わかんないじゃない。もっとちゃんと説明してよ」

「うるせぇな。［　B　］と。手で触ってみりゃだいたいのことはわかんだろうがよ」

私が反論しようと口を開きかけた時、典子が「私は大丈夫よ」と言い、「ほら、ストローの袋も破って、はい、これでオッケー」と続けた。

私は唇を噛んで、兄に文句を言うのを我慢した。

兄は視覚障害者の不便さをまったくわかっていない。わかろうと努力しないからだ。父の介助も酷かったが、兄のは［　　］だ。こんなにヤクに立たない晴眼者（注9）なら側にいない方がましだ。

やがて、典子が盲人卓球をはじめたきっかけを話し出した。

私は相槌を打ちながら、典子の話に［　　］を傾けた。

兄は一言も口を挟んでこない。真剣に聞いていないからだろう。やっぱり同行してもらうんじゃなかった。

典子が言った。「盲人卓球については、こんなとこね。なにか参考になったらいいんだけれど。ねぇ、そういえば、今日は電車で来たの？」

「タクシーです」

「あら、お兄さんの同行があれば、電車にだって乗れるんじゃない？」
「兄を信用できないんです」
「あらあら。ま、同行するのもコツがいるものね。視覚障害者が一人で電車に乗る場合の基本って、よく聞くわよね。まず、点字ブロックにそって歩く。自動券売機の位置を確認するには、お釣りが出てくる時の音を参考にする。点字料金板で目的地までの金額を調べてから――って結構大変よね。でも⑩裏技もあるのよ」
　私は驚いて聞き返した。「裏技？」
「そっ。とりあえず一番安いのを一枚買って、改札に入っちゃうの。出る時に、駅員に切符を見せて、差額分を払うようにすれば簡単でしょ」
「あぁ……なるほど」
「あんまり真面目に考えない方がいいわよ。晴眼時と同じようにしようとするから、大変だなってめげちゃうけど、ちょっと頭を柔らかくして、別の方法を考えればいいのよ」
　兄が突然口を挟んできた。「そういうの、凛子は一番苦手なんです」
　私は思いっきり兄の足を蹴った。
「うっ」と、兄の声が洩れてきた
　典子が言う。「エレベーターもそうよ。音声案内のないエレベーターだと、同行者がいなくて、同乗者もいない時、ドアが開いても、自分が降りる階かどうかわからないじゃない？」
「そうなんです」私は同調した。「だから私、ボランティアの人が一緒じゃない時は、階段で九階まで上ってるんです」
「九階？　大変じゃない。そんな時はね、全部押すのよ」
「はい？」
「一階で乗るでしょ。で、二、三、四って九階まで全部押すの。それで、ドアが開く度に数えるのよ。にぃ、さぁん、しぃって。

で、八回目に開いたところが、九階」

私が絶句(ⓐけ)していると、兄が性懲(ⓑしょうこ)りもなく、また口を挟んできた。

「頭、いいっすね。そうだよ。凛子もさ、そういう風に融通(ⓒゆう)を利かせるっていうのか？　そうすりゃ、もっと生き易(やす)くなるんだよ」

私は兄の方へ顔を向けた。「エレベーターを待っている人がいたら、迷惑(めいわく)をかけることになる」

「迷惑なんて」典子が言う。「かけちゃいなさいよ。なんたって、こっちは目が見えないんだから。私もね、昔は――視覚を失ってしばらくは、(11)凛子ちゃんみたいに思ってたわ。でもね、晴眼者だって、決して一人では生きてないのよ。誰(だれ)かにサポート(ⓓこ)されて、助けられて生きているんだから、それよりちょっとばかり多く助けてもらったって、構わないじゃないって開き直ったら、楽になっちゃった。電車もね、最初は一人で乗るの、怖(こわ)かったの。でもね、電車とホームの間に何度も落ちてるうちに――」

「何度も落ちたんですか？」私は大きな声を上げた。

「そうよ。何度も。その度に、ひょいって周りの人たちに引き上げられた。助けてくれるのよ。もっともっと助けていただいたって、いいと私は思うわ」

(12)私はただ瞬(まばた)きを繰り返した。

（桂望実(かつらのぞみ)『明日(あした)この手(て)を放(はな)しても』）

（注１）白杖…視覚障害者が道を歩くときなどに、安全を確保するために使う杖(つえ)。
（注２）全盲者…目に障害があって、見ることがまったくできない人。
（注３）ナビ…ナビゲーションの略。案内。誘導(ゆう)。
（注４）アシスタント…助手。
（注５）西尾…父の担当であった漫画(まん)雑誌の編集者で、父がいなくなった後は凛子の担当となった。
（注６）コマ割り…マンガの絵を枠(わく)で区切ること。
（注７）演出…台本にもとづいて、作品を組み立てていくこと。

（注８）ハッピーサポート…視覚障害者の社会復帰を援助するボランティアの団体。
（注９）晴眼者…視覚障害を持たない人。

問一　═══線㋐～㋒のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二　〰〰線ⓐ「堂々巡り」・ⓑ「性懲りもなく」・ⓒ「融通を利かせる」はどういう意味ですか。最も適当なものをそれぞれ後の中から選び、記号で答えなさい。

ⓐ 堂々巡り
- ア　激しい口調で立ち向かっていくこと
- イ　自分の考えを何度もよくねりなおすこと
- ウ　そのとおりであると同意してうなずくこと
- エ　同じようなことを繰り返すだけで発展しないこと

ⓑ 性懲りもなく
- ア　同じ失敗を何度も繰り返して
- イ　性格が悪いことを表に出して
- ウ　自分の行動をしっかり見直して
- エ　もはやどうしようもない状態で

ⓒ 融通を利かせる
- ア　恥ずかしさをおさえる
- イ　最後まで自分の意志を貫く
- ウ　必要に応じて行動を変える
- エ　相手の意見や考えを尊重する

問三　――線①「私の声には不安な心持ちが反映されているのではないかと思う」とありますが、なぜそう思うのですか。理由を表している一文を、本文中から探し、その最初の五字を答えなさい。

問四　――線②「たった二人の兄妹であっても、精神的な距離はとても開いていた」とありますが、「私」がこのように感じた理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　本当の兄妹ではないことを私は父から聞いて知っていたから。
イ　兄の言動には、家族としての温かさが感じられなかったから。
ウ　年の若い兄では、父の代わりにはなれないことを痛感したから。
エ　兄は全盲者となった私の立場を考えず、マイペースに行動するから。

問五　――線③「凛子、足を蹴んなよ」とありますが、このときの私の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　相手の考えを理解できない兄に、妹として寂しさを感じている。
イ　盲人卓球に取り組んだことのない兄に対して、後ろめたさを感じている。
ウ　話し手への配慮（りょ）のない兄のことばに、身内として恥ずかしさを感じている。
エ　初対面の相手に対しても堂々とした兄の態度に、家族として誇りを感じている。

問六　――線④「おもしろいお兄さんね」とありますが、「典子」のどのような気持ちが読み取れますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　相手の発言は晴眼者にとってはふつうの反応であると、自然に受け入れる気持ち。
イ　相手の盲人卓球は運動神経で争っているのではないという意見に、感心する気持ち。
ウ　相手の発言が失礼なものであることを認めながら、それをおおらかに受け止める気持ち。
エ　相手のひどいことばづかいに本人が気づかないままでいることを、かわいそうに思う気持ち。

問七　――線⑤「後悔していた」とありますが、「私」がこのように感じた理由として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　私の中に、兄の意見を越えるものを見つけることができなかったから。
イ　自分勝手であり、きちょうめんすぎる兄といっしょに来てしまったから。
ウ　想像力が欠けている兄を、仕事のパートナーとして選んでしまったから。
エ　相手に対する心配りができない、無神経な兄を連れてきてしまったから。

問八　――線⑥「典子が笑いながら言った」とありますが、「典子」はどのような人ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　笑うことによって、自分の心の安定を保とうとしている人。
イ　小さなことはあまり気にすることがなく、前向きで明るい人。
ウ　言い争いを好まず、全ての人が笑って過ごせればよいと思う人。
エ　視覚障害者であっても、自分でなんでもこなしたいと思っている人。

問九　A ・ B に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使ってはいけません。

ア　ケラケラ　　イ　クスクス　　ウ　ドンドン　　エ　ワンワン　　オ　キャンキャン

問十　――線⑦「目の前に視覚障害者が二人いるのに、なにしてんの？」とありますが、「凛子」は何をとがめていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分のペースで話をしていること。
イ　飲み物の外に何も注文しないこと。
ウ　どこにグラスがあるか示さないこと。
エ　大きなくしゃみをしてハナをかんだこと。

問十一　――線⑧「私は唇を噛んで」とありますが、なぜ「私は唇を噛ん」だのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　身勝手な兄をうとましいと感じているから。
イ　兄に対する怒りや悔しさをこらえているから。
ウ　視覚障害者としての不便さを感じているから。
エ　兄には口では勝てないことを知っているから。

問十二　――線⑨「わかろうと努力しないからだ」とありますが、これは兄のどのようなところを言っているのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　家族としてのつながりの大切さについてまったく理解しようとしないところ。
イ　まわりの人が日常的に感じている悩みや不安について寄り添おうとしないところ。
ウ　兄妹でありながら、凛子が盲人卓球に興味があることに気づこうとしないところ。
エ　日常生活で、どんな情報を視覚障害者が必要としているか想像しようとしないところ。

問十三　〰〰に入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　桁外れ（けた）　　イ　筋違い（ちが）　　ウ　仲間外れ　　エ　おかど違い

問十四　□には体の一部を表すことばが入ります。漢字一字で答えなさい。

問十五　――線⑩「裏技」とありますが、具体的にどうすることですか。次の［　　］にあてはまるように、文中のことばを用いて三十字程度で答えなさい。

電車に乗るとき、［　　］こと。

問十六　――線⑪「凛子ちゃんみたいに思ってたわ」とありますが、具体的にどのようなことを思っていたのですか。「ということ」につながる形で十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

問十七　――線⑫「私はただ瞬きを繰り返した」とありますが、このときの「私」の気持ちの説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　典子のふてぶてしい考え方に、今までにはなかった失望を感じている。
イ　典子の予想外の考え方に対して、新たな気づきを得て、驚きを感じている。
ウ　典子の身勝手な考え方に対して、これまで感じたことのない怒りを感じている。
エ　典子の合理的な考え方を、自分が持っていなかったことを恥ずかしく感じている。

問十八　本文の特徴を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　はからずも視覚障害者と同行者となった妹と兄のやりとりをユーモアたっぷりに描いている。
イ　全盲者として生きることに対してのとまどいや葛藤（かっとう）を、「私」の視点からリアルに描いている。
ウ　全盲者として生きることの悲しみや苦しみを、自分自身の体験を通して切々と読者に訴（うった）えている。
エ　視覚障害者が置かれていた社会的な状況（きょう）について、小説という形式を使いながら淡々（たんたん）と説明している。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

そもそも、意見が違うとはどういうことでしょうか。まず、もとになる情報、ないし状況の認識が違って、意見が違うという最も単純な例で考えてみましょう。

A 、あなたともう一人が何かの行事の進行を任されているとします。開始は一〇時です。あなたの時計ではまだ一〇時五分前ですが、もう一人のもつ時計ではもう一〇時だと言います。どちらかの時計が正しく時間を示していないようです（なお、周りに時間を示すものはなく、また、時間を尋ねられるほかの人は周囲にはいないとします）。こうした例は、単純な、しかし、①根本的な情報の違いと言えます。そして、よくあることです。

B 、自分の主張はどのような表現で言えばいいでしょう。自分に自信があるかどうかでいろいろと言い方が変わります。まず、1 （注1）バージョン。

あれ、私の時計ではまだ一〇時五分前だよ。じゃあ、私の時計、おくれているんだね。

この場合、②相手の主張を優先しすぎです。本当に自分の時計が壊れている可能性があるのならそう言えばいいのですが、相手の時計がおかしいという可能性もあるという段階で、一方的に自分がおかしいと決めつけるのはよくないでしょう。

次に、ちょっと 2 バージョン。

まだ一〇時ではないよ、何言ってんの。その時計はおかしいよ。

こんな感じです。もちろん、はっきりと相手がおかしいなら、また、お互いに遠慮のない間柄ならそう言ってもいいのですが、ちょっと言い過ぎかもしれません。特に、本当のところ自分が間違っているという可能性がある、という段階では、相手の時計が間違っていると決めつけるのはよくないでしょう。

最後に、ふつうバージョン。これには二通りの例が考えられます。

まだ一〇時ではないよ。

私の時計では、まだ一〇時ではないよ。

この場合も、「私の時計では」があるかないかで、微妙にニュアンスが変わってきます。「私の時計では」があると、文字通り、「私の時計」だけを取り上げるので、「自分の時計＝正しい時間」という主張にはなっていません。あくまで、「私の時計において一〇時になっていない」という事柄だけが言われているからです。これに対して、単に「まだ一〇時ではないよ」と言えば、それは、「正しい時間」だけを取り上げることになっています。表現はされていませんが、前提として、「自分の時計＝正しい時間」という扱いになっているのです。ちょっとした違いではありますが、この場合には、暗に「［　　a　　］」と言うことにもなります。

意見が相違する場合、このような、ちょっとした言葉遣いの違いによって、自分や相手を否定する度合いが違ってきます。特に、このように、一つしか答えがない場合、それほど強く思っていないのに、相手を否定してしまうことにもなります。③そして、意見が対立する場合、人間関係の対立の原因となることもあるのです。

ただし、意見が対立した場合、理想的なことは、その違いを楽しむことです。

あれ？　時計の時間が違うぞ。どっちが正しいのかな～。

というように違いを楽しめればいいですし、お互いに、冗談でけなし合ってもいいです。

さてはお前は時計を買うときに値切りすぎたな。

なんて言い合ってもいいでしょう。

意見が違うということは、お互いに自分の頭で考えているということでもあるわけです。例えば、学校の図書室にまんがを置いてもいいかどうか、(注2)安楽死は認めるべきか、というように、世の中にはいろいろな「論争（ディベート）の種」があります。お互いに意見の違いを戦わせることで、自分の頭を鍛え、考えを深めることができます。意見の違いは、まずは、楽しむべきことだと言えます。④相手の意見を受け入れ、自分も主張していく、といったことをまずは楽しみましょう。いろいろな考え方と触れることで、自分も考え方が深くなります。

ただ、理想通りにいかないこともあります。意見が違うことで、何か感情的な「わだかまり」ができてしまうこともないわけではありません。相手との人間関係が安定していないような場合などは特にそうでしょう。

ここで、「感情」と「意見の違い」ということについて、少しだけ考えてみましょう。

よく、意見が相違する場合、違う意見が言いにくい、という話を耳にします。また、違う意見を言ったために、その人から感情的に反発されてしまったということも聞くことがあります。

私たちは、誰でも、自分のことを認めてほしいという根本的欲求を持っています（これは強すぎても弱すぎてもいけない欲求です）。自分の言うことは一応信じてほしいし、自分のことを無視されるのはいやです。自分の意見に対しても同じことで、私たちは、自分が主張することに対して、基本的には認めてほしい、という欲求を持っていると言えそうです。多くの場合、相手の意見が自分の意見と同じであるほうが、⑤何となく安心したりするのもこのためでしょう。自分の意見に挑戦されて、それをおもしろがれる人は、自分に b ある人です。しかし、中にはそういう b がなくて、面とむかって反対されたり否定されたりすると、自分が認められていないというように感じてしまうという人もあります。

もちろん、情報の信頼性や意見の妥当性（注3）は、その人の人格とは全く別の事柄ですから、自分が主張することが否定されたからといって、自分が認められていない、などと考える必要はありません。まして、自分の意見に対して疑問を持たれたり、反対意見を持たれたりしたからといって感情的になってしまうことは決して望ましいことではありません。ただ望ましいことではないにせよ、現実には、そういう感情的なことも切り離せないのです。

そこで、こうしたことに関連した問題が三通り起こり得るのです。

一つは、自分の意見に対して疑問や反対意見が言われた場合に感情的になってしまう場合です。この場合には、「しっかり考えて、感情におし流されないように気をつける！」としか言いようがありません。受け入れるべきは受け入れ、それでも自分は違うと思うなら、その根拠も含めて明確に主張していけばいいでしょう。どうでもよければ聞き流してもかまいません。自分なりにしっかりと考えることが大切です。特に、知的な内容の事柄であれば、内容は内容、気持ちは気持ち、というふう

にしっかり分けて、感情はひとまずコントロールする必要があります。これは⑥心構えの問題です。

次に考えられるのが、自分が自分の意見を配慮なしに言ったために、相手を不用意に感情的にさせてしまうという失敗です。「言い方に配慮があればきちんと伝えることができたのに、そうしなかったばかりに感情的反発を招いてしまった」という失敗は、誰しもあるのではないでしょうか。

さらにもう一つ、相手の感情に「遠慮」しすぎるあまり、言うべきことが言えないという場合もあります。はっきり言わなかった（言えなかった）ために、最終的にあとで強く後悔してしまうというのもよくあることです。これは目立った「失敗」とは認識されにくい点で、よけいにやっかいな問題かもしれません。

人間は感情を持つ動物ですが、その感情のために、しっかりとした意見の交換ができなくなることも現実にはあります。その意味で、感情は「コミュニケーション上の障害」となり得るものです。

そこで、そういうコミュニケーション上の障害を乗り越えるために、⑦「言いにくいことを言う場合の作戦」を考えてみるというのはどうでしょう。どのように言えばいいか、という「表現」への視点を持ってみるのです。こう考えてみることで、自分の心をコントロールすることもやりやすくなります。言うべきことも、きちんと考えた上で言えるようになります。

また、そういう視点を持っていれば、ほかの人から何かを言われた場合でも、「言い方」の問題と「内容」の問題とを分けて考えることができます。そうすることで、「自分のことを客観的にみる見方」「素直に自分の至らなさを認める心」を呼び覚ますこともできるでしょう。

自分が「正しい」と思うことを言うのに、もちろん、「遠慮」はいりません。しかし、時と場合によっては「配慮」はあっていいでしょう。逆に、そうした「配慮」をしてみることで、「言うべきことが言えないまま」になることも防げるような気がします。

（森山卓郎『コミュニケーションの日本語』）

（注１）バージョン…ここでは「～の場合」という意味。
（注２）安楽死…苦しまないで死ぬことを選ぶこと。
（注３）妥当性…それがふさわしいかどうか。

問一　A ・ B に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使ってはいけません。

ア　では　　イ　しかし　　ウ　例えば　　エ　あるいは　　オ　なぜなら

問二　――線①「根本的な情報の違い」とありますが、どのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分の時計が本当は正確ではないことを知っていること。
イ　自分の時計が正しくて相手の時計が違っていると思うこと。
ウ　自分の時計と相手の時計が示している時間が違っていること。
エ　自分の時計と相手の時計では使われる目的が違っていること。

問三　1 ・ 2 に入ることばの組み合わせとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　1 気弱な人・2 攻撃的な人
イ　1 冷酷（こく）な人・2 積極的な人
ウ　1 幼稚（ち）な人・2 感情的な人
エ　1 強情な人・2 否定的な人

問四　――線②「相手の主張を優先しすぎ」とありますが、どのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　どちらが間違(ちが)っているか考えるのをやめてしまうこと。
イ　よく考えずに自分が間違っていると認めてしまうこと。
ウ　一方的に相手が間違っていると決めつけてしまうこと。
エ　お互いに相手が間違っていないと譲(ゆず)り合ってしまうこと。

問五　a　に入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　あなたの時計だよ
イ　あなたの時計は正しいよ
ウ　あなたの時計は安物だよ
エ　あなたの時計は間違っているよ

問六　――線③「意見が対立する場合、人間関係の対立の原因となることもある」について、筆者は何がもとで対立を生むと言っていますか。本文中から十三字で抜き出して答えなさい。

問七　――線④「相手の意見を受け入れ、自分も主張していく、といったことをまずは楽しみましょう」とありますが、このような事柄の例として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　文化祭でクラスの出し物を決めるとき、いろいろなアイディアを出し合ったあとで、リーダーが中心になって最も実現可能な案を強く提案していくこと。

イ　合唱コンクールの候補曲が複数あったとき、それぞれの魅力を発表して数を絞ったうえで、最終的にはあみだくじで平等に曲を決める方向にもっていくこと。

ウ　家族旅行で「沖縄に行きたい」という意見と「北海道に行きたい」という意見に別れたとき、旅行先でやりたいことを述べあい、一緒に旅行のイメージをふくらませていくこと。

エ　昼食で「ラーメンが食べたい」という意見と「寿司を食べたい」という意見が出たときに、それぞれの料理の特徴を挙げながら、何を食べるか多数決で公平に決めようと主張すること。

問八　――線⑤「何となく安心したりするのもこのためでしょう」とありますが、この理由を筆者が述べている部分として最も適当なところを本文中から「から」に続く形で四十五字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問九　b　に共通して入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　問題　　イ　反発　　ウ　配慮　　エ　自信

問十　――線⑥「心構えの問題」とありますが、相手と意見が違った際に考えた方が良いこととして筆者が具体的に述べている部分を本文中から「と考えること」に続く形で四十八字で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問十一　～～～線「最終的に」は直接どのことばにかかりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

最終的に　ア あとで　イ 強く　ウ 後悔（かい）してしまう　エ というのも　オ よくあることです。

問十二　――線⑦「言いにくいことを言う場合の作戦」とありますが、どのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分の考えが正しいと信じていても、相手の意見を受け入れること。
イ　相手の立場や考えを尊重しながら、自分の意見が伝わるように工夫すること。
ウ　相手の立場や考えを理解しつつ、自分の信じていることを強く主張すること。
エ　自分の考えが間違っていないとはっきりと示して、相手の歩み寄りを促すこと。

問十三　……線㋐～㋓の「みる」の中から他と働きがちがうものを一つ選び、記号で答えなさい。